

当教室における外国人医師の 養成と国際活動

鹿兒島大学医学部 有田和徳

新年明けましておめでとうございます。鹿兒島県医師会員諸兄におかれましては、益々ご健勝にて新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

早いもので、私が約35年ぶりに故郷に戻り、鹿兒島大学脳外科に着任して5年が経ちます。この間、順調に進んだ領域もありますし、予想以上に苦勞している部分もあります。

この5年の中で何よりも嬉しかったのは、着任早々から脳外科同門会の先生方や医師会の先生方から多くの患者様を御紹介いただいていることです。おかげさまで、手術件数は大幅に増加し、脳腫瘍の領域では全国でもトップ5に入る手術実績(2009年)となりました。この場をお借りして、県医師会員の先生方に御礼申し上げます。また、若い医局員達が、非常に多忙な中、一生懸命に研究に取り組んでくれ、2010年1年間でpublishされた英文論文は10本に上りました。

その一方で、外科系医局の例に漏れず、脳外科専門医を目指す入局者の確保には苦勞しており、着任以降5年間の新規入局者は本年4月入局予定者まで入れて13人で、このため、関連医療機関には多大な御迷惑をかけております。

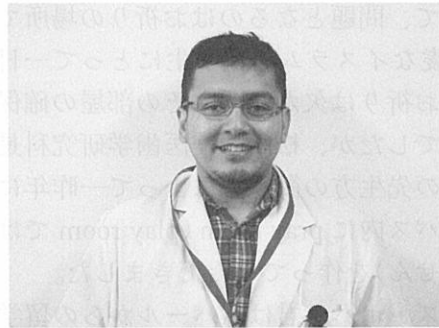
しかしながら、医局は活気にあふれています。これは、若い医局員がいずれも一騎当千のつわものぞろいということもありますが、もう一つの重要なエネルギー源は外国人学生、研究者の存在です。

私は、広島大学在籍中から、インドネシ

ア国、中国、ネパール国など各地で、新しい脳神経外科の担い手となっていただくように若い人たちを育ててきました。幸い、鹿兒島に来てからも、留学生に恵まれ、現在2名の博士課程大学院生、1名の病院見学生(本年4月から博士課程入学予定)、1名のポスト・ドクを受け入れています。

留学生を一人一人紹介しながら、当教室の国際活動について報告したいと思いません。

インドネシア国からの留学生はユーリツ・バクティアル君で、ジャワ島中部のセマラン市ディポネゴロ大学の出身です。ディ



ユーリツ・バクティアル君
(インドネシア国)

ポネゴロ大学脳外科は、1993年から私が技術移転などの支援を続けて来た施設で、本年からはインドネシア国4番目の脳外科レジデントセンターとなる予定です。ユーリツ君の研究テーマは「成長ホルモン産生下垂体腫瘍におけるサイトケラチン染色パターンと臨床病理像」でしたが、大学院2年目修了段階で、早くも学位論文を完成させ、現在は厚労省認定臨床修練外国人医師として脳外科技術修練の最中で、脳腫瘍摘出術にも積極的に参加しています。インドネシアの人口は1億8千万人に対して脳外科医の数は150人と、人口100万人に一人以下の稀少戦力ですので、帰国後の活躍が期待されます。今後ディポネゴロ大学からは、大学間協定に基づいて、毎年2人前後の医学部学生を短期交換学生として受け入れる

マイクロサージャリーに取り
組むユーリツ・バクティ
アル君(2010年11月)

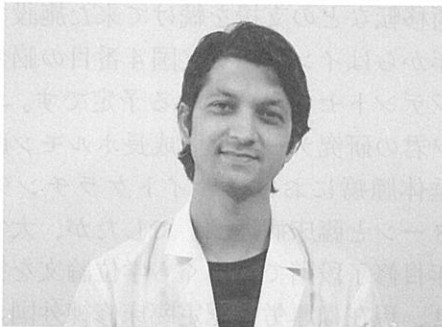


予定です。

ユーリツ君を含め、現在桜ヶ丘キャンパスには9人のイスラム圏からの学生が在籍していますが、いずれも敬虔なイスラム教徒です。イスラム圏の留学生が増えるにしたがって、問題となるのはお祈りの場所です。敬虔なイスラムの留学生にとって一日5回のお祈りは欠かせず、その部屋の確保が課題でしたが、松山隆美医歯学研究科長等多くの先生方の御尽力によって一昨年にキャンパス内に pray room (play room ではありません)を作っていただきました。

マノズ・ボハラ君はネパールからの留学生です。国立トリブバン大学医学部6年生

マノズ・ボハラさん
(ネパール国)



の時に留学生試験を受け、日本大使館推薦枠で奨学金を獲得、医学部を卒業してすぐに来日し、当大学院に入学しました。高校卒業時の成績が全国トップで新聞紙上をかざったこともあるという秀才で、来日して1年で英文の症例報告を論文発表し、現在2本目を投稿中です。研究の方も薬理学教室の宮田篤郎教授に指導を受けており、着

実に進行中です。マノズ君の強みは、なんと言っても英語力です。これはネパールの高校、大学教育が英語で行われるという環境、卒業生の6-7割がアメリカに行くという医学生の志向も影響しています。逆に困ったのは、大学院入学に必要な英語能力の証明が無いことでした。医学部学生であるかぎり英語をしゃべれてあたりまえという環境ですから、English aptitude testは受けていません。したがって、当大学院入学にあたっては、「native English speaker である」という一文で許していただきました。近い将来は英語を母国語とする学生に対する当大学院入学規定も整ってくることでしょう。また、アリア系の目鼻立ちと気さくな性格で女子学生に抜群の人気があり、桜ヶ丘キャンパスのみならず郡元でも数多くのファンや追っかけがいます。おかげで、マノズ君の司会のもと当教室で毎週金曜日朝に開いている neuroanatomy の輪読会は大人気で、10名以上の学生が朝7時から集まって、熱心に勉強しています。



毎週金曜日朝の神経解剖勉強会(立っているのがマノズ・ボハラ君)

プラサンナ・カルキさんはマノズ君と同じカトマンズの出身で、昨年10月に、医学部を卒業して半年で来日しました。人口二千万人のネパールで脳外科医は20人前後ですが、女性脳外科医はまだいません。プラサンナさんは本年4月から大学院入学予定で、無事学位を取得し帰国すれば、ネパールでは学位を有する最初の女性脳外科

新春随想



ブラサンナ・カルキさん
(ネパール国)

医になることでしょう。彼女もまた薬理学教室で勉強中ですが、来日早々に脳外科の方の臨床研究にも取り組んでいます。こちらも英語が堪能で、マノズ君と一緒に金曜日夕方の英語クラスの講師をしています。また、写真のような美人ですから、日本の男子学生達に対する警戒を怠ることは出来ません。



フランシア・カンポスさん
(コロンビア国)

フランシア・カンポスさんはコロンビア出身。最初に疫学・予防医学分野の秋葉澄伯教授の下で学位を取得され、その後、コロンビアで脳外科医として貢献することを志され、当教室に入局されました。厚労省認定外国人臨床修練医師として2年間の脳外科臨床トレーニングの後、現在は国際島嶼医療学講座の嶽崎俊郎教授のプロジェクト研究員(ポスト・ドク)として、「ITカルテの脳外科医療における有用性」などの研究テーマで、主として当教室で研究中です。また、帰国後のポジションについてリクルート活動中でもあります。

私たちは、このような外国人の受け入れ



インドネシア国、テイボネ
ゴロ大学で技術指導中の著
者(2004年)

のみならず、現地での技術指導も重視しています。私自身は、広島大学在籍中から数えると、中国、インドネシア、ネパールの3カ国で30回におよぶ技術指導をおこなってきました。ハイテク医療機器の完備した日本で学んだ医療技術を、基本的な器具さえそろわない現地での医療に活かすには、現地での指導が欠かせないと考えているからです。たとえば、インドネシアでマイクロサージャリーを導入するためには、どこの病院でもあるような眼科用の簡単な顕微鏡を使って実際にデモンストレーション手術を行う必要性があります。また、吸引管はあり合わせの金属管というセッティングで、なんとか脳動脈瘤のクリッピングを成功させる必要性があります。場合によっては、日本では選択しないような手術アプローチを取って選ぶ必要もあります。そういう実践的な指導の積み重ねから、自分たちの病院でもこんな手術が出来るんだと実感した若いアジアの脳外科医が、一歩進んだ脳外科手術を自ら実施出来るようになってきています。これからも若い医局員と分担しながら、現地技術指導を続けていきたいと思っています。

このように、当教室では現段階でアジア太平洋圏から4人の英語が堪能な外国人医師を受け入れていますので、カンファランス等は出来るだけ英語で行うようにしています。最初は、「患者が紹介され…」を

was introduced by…、「患者が診断された」を was diagnosed as…などと言っていた若い教室員も、少しずつですが的確な英語を身につけてきています。何よりも大切なのは、臆せずに英語を話す癖がついてきたことで、若い人たちの医師としての今後の人生に優れた影響を与えることと思います。

一方、異なった宗教を背景に持っている複数の留学生がいると、食事には気を遣います。ネパールの二人はヒンディーで牛は絶対だめ、ユーリツ君はムスリムで豚は絶対だめ、そのほかの動物や鳥もハラル(Halal)認証が必要、一方日本人とフランシアさんは雑食(失礼)です。医局での歓送迎会のたびに幹事が苦勞しているようです。

鹿児島は古くから、広く世界に視野を開き、また世界の英知を吸収してきた技術と文化の hub(流通拠点)でした。現在、医歯学総合研究科では離島へき地医療人育成センターのプロジェクトを通じて、アジア・環太平洋圏における離島へき地医療人の人

材育成を推進しています。私たち脳外科教室でも、引き続いてアジア・環太平洋域からの留学生を積極的に受け入れ、技術と知識の移転を進め、鹿児島大学医学部の国際化に寄与すると同時に、一方では私たち自身が文化多様性への対応能力やコミュニケーションスキルを高めたいと思っています。

最後に、留学生の受け入れにあたり、多大な御協力、御支援を賜っております医療法人慈風会理事長 厚地政幸先生、財団法人慈愛会理事長 今村英仁先生をはじめとする鹿児島県医師会の諸先生方に深く感謝申し上げます。

また、何かの折りにこれらの留学生達にお会いされることがありましたら、気楽に御声を掛けていただき、交流を深めていただければ幸いです。(了)

(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科

脳神経外科学 教授)

「県医ロビー」原稿募集

鹿児島県医師会報では、「県医ロビー」のコーナーを設けております。会報編集委員会では、会員の皆様方から随時原稿を募集しておりますのでふろってご投稿下さい。

記

枚数：1,200字以内 ※顔写真を1枚お送り下さい。

締切日：毎月月末ですが、原稿の仕上り次第随時ということで結構です。

送り先：〒890-0053 鹿児島市中央町8-1 鹿児島県医師会会報編集委員会